

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association of subjective health and abnormal cervical cytology in Japanese pregnant women: an adjunct study of the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

日本人妊婦における主観的健康度と子宮頸部細胞診異常との関連:子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)の追加調査

ユニットセンター(UC)等名: 宮城ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Preventive Medicine Reports

年: 2021 DOI: 10.1016/j.pmedr.2021.101525

筆頭著者名: 佐々木 里美

所属 UC 名: 宮城 UC

目的:

本研究は、エコチル調査の追加調査として、前向きコホート研究の一部を横断的に分析し、妊婦の主観的健康度と子宮頸部細胞診異常との関連を検討した。

方法:

エコチル調査宮城 UC 参加者のうち、妊娠初期に実施する子宮頸部細胞診の医療記録を転記した医療機関で分娩し、主観的健康度に関する質問票に回答した 3,024 名を対象とした。主観的健康度に基づき、非常に良い群、良い群、まあまあ群、悪い群の4つに分類した。子宮頸部細胞診の結果は、ベセスダ分類に基づき正常と異常に分類した。年齢、妊娠前の肥満度、妊娠期間、その他の交絡因子で調整したロジスティック回帰分析を用い分析した。

結果:

106 人(3.5%)に細胞診の異常が認められ、その有病率は、主観的健康度が悪い群、まあまあ群、良い群、非常に良い群で、それぞれ 1.3%、3.7%、3.9%、4.0%であった。主観的健康度が悪い群と比較して、他の 3 つのグループでは、交絡因子を調整した後の細胞診異常のオッズ比(OR)が有意に高かった(まあまあ群:調整済み OR(aOR)=3.6、95%信頼区間[1.0-12.1]、良い:aOR=4.6[1.3-15.5]、非常に良い:aOR=4.6[1.2-17.8])。

考察(研究の限界を含める):

本研究は妊婦の結果ではあるが、妊娠可能年齢の女性において自分では健康であると思っても子宮頸がんのリスクがあり、定期的な子宮頸がん検診の受診などの予防活動が必要であることが示唆された。本研究の限界は、妊娠前の HPV(ヒトパピローマウイルス)感染と性生活の質を適切に評価していないこと、参加者の「子宮頸がんに対する意識」を調査していないこと、主観的健康度が子宮頸部細胞診の結果によって変化している可能性を否定できないこと、等が挙げられる。

結論:

妊婦の子宮頸がん検診の陽性率は3.5%であった。主観的健康度が高い人では低い人に比べ、子宮頸部細胞診異常のオッズ比が高かった。妊娠適齢期の女性において、自分が健康であると思っても、子宮頸がんのリスクを抱えている可能性があり、定期的な子宮頸がん検診などの予防活動が必要であることが示唆された。